生きている魚を食べること

金屋小・２　森島　だいき

ぼくは、おすしが大すきです。くらずしやはまずしに行くと、たくさんのおすしがながれてくるのでうれしいです。とくに、赤いマグロが大すきです。だけどぼくは、マグロが魚だと知りませんでした。マグロのしゃしんを見せてもらうと、体はくろとかぎん色でびっくりしました。ぼくがこの本を読もうと思ったのは、おすしにはいろいろなうみの生きものがネタでごはんの上にのっているので、それをもっと知りたいと思ったからです。

この本では、キンメダイとアナゴとイカがおすしになるところが出てきます。ぼくは、イカのおすしは食べたことがあります。だけど生きているすがたは、考えたことがありませんでした。色は白ではなくて、赤っぽい色をしていました。うでは十本と多くて、頭から生えていました。ぼくが頭と思っていたところは、体でした。それをさばいていくと、ぼくの知っているすがたになっていきました。キンメダイは、はじめて知りました。おすしのときは、みが白色だけど魚のときは、うろこが赤色でした。口は大きくていぶくろの中には、小さい魚とかが入っていました。キンメダイは、べつの魚を食べるのがわかりました。

ぼくは、おすしのネタが、生きているときには、どんなすがたなのか知りませんでした。おすしにするために生きている魚をしなせて切って食べます。本には、「わたしたちは、たくさんのいのちでできているんだ。」と書いてありました。これはおすしだけではなく、どの食べものでも同じだと、おとうさんが言っていました。食べるために、生きものをしなせるなんてかわいそうです。でも生きるために食べるのは、しょうがないです。だからいのちを大切にすることは、しっかり食べることだと思いました。ぼくは、とろろとかゴーヤがきらいでのこしてしまいます。だけどしっかり食べたいです。そして、ごちそうさまと言えるようになりたいです。

４・９